

Eureka VI

六年制通信 No. 3 平成 30 年 4 月 20 日 (金) 号

まずは量を蓄える

私事で恐縮ですが…。何十年も頭に引っかかっていた疑問にひょんなことから再会することがあるものですね。疑問は疑問のまま残り続けることがほとんどですが、それはそれでなかなか楽しいものです。昨日でしたか、津市出身の英語学者である細江逸記 (1884-1947) の遺稿が、雑誌「英語青年」の第 94 巻第 7 号 (昭和 23 年発行) に載っていると知って、本棚から引っ張り出して読んだのです。そしたら後半部分にシェイクスピアのハムレットに登場する、いわゆる ‘fat 問題’ の考察がありました。驚きました。皆さんには何のことかわかりませんね。でも 6 年生の諸君はこの通信で ‘fat 問題’ を一度目にしているのですよ。通信を始めた最初の年の No.33 (平成 26 年 2 月 7 日号) でね。だけど、覚えていないでしょうなあ。

最後の場面、剣を持って戦うハムレットに対し、王妃ガートルードが「あの子は fat だから、すぐに息が切れるのよ」という台詞があって、この fat の語意がずっと問題視されてきているのです。ハムレットが「太っている」でいいのか、という問題ね。この場面を坪内逍遙は「肥ってゐやれば息が切れう」と訳しています。細江先生は、明らかな誤訳と断じています。白水社の全集では小田島雄志が「あの子は汗かきでもう息を切らせている」(第 3 巻 p.520) と解釈しています。そう、fat は汗をかいている、すなわち *sweaty* の意味だと考えている人が結構いるのです。その発端となった出来事は何か、私は漠然としか知らなかったのですが、遺稿に詳しく載っていました。皆さんは、たぶん興味ないでしょうから詳細は割愛しますが、(読みたい人にはお見せしますよ) 細江先生は「汗かきで息が切れる」ではまだ不十分だとしておられます。「汗だらだら」「汗だく」「汗しとど」「油汗を流して居る」などを候補としてらっしゃいます。なるほどなあ。しかもシェイクスピア以外の作家で *sweaty* と解釈しないと意味の通らない場面で fat が用いられている例も挙げていらっしゃいます。昭和 23 年発行の雑誌ですから、若い時に当然読んでおくべきだったのに、全く勉強不足だと反省したわけです。まだいくつも、若いころからずっと疑問に思っている、あるいは誤解したままになっていることがたくさんあるように思います。また、偶然に出会えることを楽しみに待っていようと思います。

さて、話は変わりますが、最近の将棋界は本当に面白いですね。まあ、これも興味があればの話ですが。藤井聡太六段の大活躍以来、ネットなどで対局が中継される回数が増えました。ところが、もちろんファンは喜んで観るわけですが、朝の 10 時に始まって夜の 11 時過ぎに決着がつくといった対局をずっと放送されると、観ている方も

くたくたになるわけです。先日も羽生さんが名人戦に挑んでいて、その第1局が放送されていたのですが、そして私はついうっかり最後まで観ていたのですが、終わった後は興奮してなかなか眠れなかったですね。ちょうど羽生さんの1400勝を飾る対局で、もし名人のタイトルを取れば通算100という記録達成にもなるのです。私は羽生さんが好きで、若い頃から応援しているのですが、今回はいつも以上に勝ってほしいと祈っています。完全な最愚ですけどね。

難しい局面では双方とも一手に何十分も考えますので、その間羽生さんの本などを読んでいますが、いくつもの言葉に考えさせられます。才能を持った人間が日々研鑽を重ねるとああいふ天才になるのでしょうか。その「羽生語録」の中でも、私の好きな言葉を紹介しましょう。手元に本がないので、正確ではないかもしれませんが、言いたいことは外していないと思います。

「アイデアというのは降って湧いてくるのではなく、いろいろな知識の組み合わせにすぎない。若いうち、というか初期のころは、自分が選び抜いた知識を吸収することから始めなければならない。当然捨ててしまう知識もあるが、それは自分で決めなくてはならない。すると、知識の量が臨界点に達したとき、それまで蓄積した知識と知識が結びついて、理解になり、やがて湧き出るようにアイデアが次から次へと出てくるようになる。そうなるまでは、やはり辛抱強く知識を蓄積していくしかない」

これは、いつも君たちに言っている「量は質を変える」ことを羽生さん流に表現してくれているようで、私のお気に入りなのです。注意深く読むと、理解する前に蓄積が必要だということもわかります。理解したものだけを蓄積するのではないところがポイントです。今はまだ理解はできていないと自覚していても、これが必要だと思えばとにかく蓄積しておく。そうするとやがて、ばらばらに頭に入れたはずの知識と知識が結びつき、深く理解できたという瞬間が訪れる。そのためには、辛抱強く知識を蓄積していくしかないと羽生さんは言い切ります。参考にしたいですね。

今週のおすすめ

今回は『二百三高地』という映画です。これは日露戦争の旅順攻囲戦を描いたもので、第三軍司令の乃木希典を中心に、かなり史実に基づいて作られた映画だと思います。実は私の20歳の時に封切になった映画で、私は津新町駅の当時はまだあった映画館で観ました。立ち見だったと記憶しています。あれから何十年も観ていなかったのですが、最近思うところがあって借りてきて観ました。感想は人それぞれだし、中高生の諸君にこの映画がどのように映るかは知りません。でも、一度は観てほしい、そう思いました。

ちなみに、久しぶりに激しい、震えを伴うような怒りを、私は覚えました。司馬遼太郎の『坂の上の雲』を読んだ時には感じたことのないような、やり場のない怒りでしたが、さて、諸君はこの映画で何を感じるのでしょうか。もし、観る機会があれば感想を聞かせて下さい。

BGMはこの映画の劇中歌、さだまさしの 防人の詩 でした…。